

## 答弁者主旨（里雄康意宗務総長）

### 「生きた教学」・「同朋会運動」について

宮本議員の質問中に、「同朋会運動」に関する私の見解の中で使用した「生きた教学」など言葉に対する確かめがあった。蓬茨祖運師をはじめとする同朋会運動に関わった先人の言葉にスポットを当て、同朋会運動の核心を明らかにしようとした質問と受け止め、所見の一端を披瀝する。

真人社が「生きた教学」と述べたのは、戦後間もなく勤められた蓮如上人450回御遠忌に際して信仰運動を提唱されたにもかかわらず、時期尚早として実現しなかったことが背景にあった。

今回、「生きた教学」と申し上げたことは、これらの背景を踏まえながら、同朋の交わりを開かれた宗祖のご生涯を憶念して、「同朋精神」を回復していくことにありと受けとめている。

「生きた教学」を取り戻すことによって、さらに「あらゆる人を御同朋として見出す眼をいただく」と述べたが、これはかつて宮城顛師が真宗本廟育成員研修会で述べられた言葉で、少し長くなりますが、該当箇所を引用する。

「私なども、いつのまにか、「御同朋・御同行」という言葉を内に向いての、内輪どうしの領きのようなニュアンスで聞きもし、言いもしてきたように思うのです。その限り、それは閉ざされた世界の歩みにしかすぎないでしょう」

と言われ、そして、

「もし、一切の人間を「御同朋」として見出していくという、そういうあり方、それこそが念仏者であるということになりますと、実は同朋会運動というのは、本来常に、いうならば、外なる世界に眼を開き、心を開いてあゆむ歩みになるはずなのですね。とにかく、「御同朋」という言葉は、一つにはそういう一切の存在、おおよそ人間というものをみる眼に則して用いられるべき言葉だと思うのです」

御同朋というのは、念仏者どうしの仲間内の領き合いの言葉ではなく、一切の人間を見る眼を言い当てられた言葉。すなわち、それは人を見る自らの眼自身が問われることであり、その問われた眼をもって「同朋としての交わり」を開くことであると受けとめている。

「真宗同朋会」は、「純粋なる信仰運動」であると云われる所以も、「門徒と称していただけのものが、心から親鸞聖人の教えによって信仰にめざめ、代々檀家と言っていただけのものが、全生活をあげて本願念仏の正信に立っていただくための運動である」から。「ほんとうの門徒になる」とは、このように本願に目覚めんとされる門徒をいうのであり、またそのような住職とともに学ぶ場が拓かれて、その時、寺が「ほんとうの寺」となっていくものと認識している。

このような広大深奥なる願いの源流を基点とする「同朋会運動」の歴史を繋いでくださった先人のことばを、今日これに関わらんとする我々が正しく受け止めることは、厳密さと主体性を欠いて評論的に解することは許されない。その言葉を現に同朋会運動に関わる私なりにどのように受け止め考えていったらよいのかという所懐の一端を披瀝すると、議員指摘の蓬茨祖運師の「失敗」という表現は、師一人の主体から滲み出た自覚的言葉である。一般的な「成功」とか「失敗」という言葉の概念を超えた言葉であると受け止めるべきでないと思う。だから「失敗したことは絶望ではない。大事なことは、その失敗したところにいかに豊かなことがあるかを知ることです」という言葉が続くのである。私たち一人ひとりの同朋会運動の取り組みにもそのような真摯な姿勢が求められていると言うべきである。

また、平野修氏の「宗派内の発想になり、すべての人を撰する意義を失うことになる」とのご指摘は、まさに如何なる教団活動もこれに関わるすべての人は、「あらゆる人を御同朋と見出す眼」を抛り所として運動展開しなければならないという課題があるということにつながる。

また、丸山照雄氏が「宗教的命脈は終焉を遂げた」と受け止められたことを、宗門人の一人としてどのように受け止めるべきかと言うことについて一考するなら、すなわち、人間の営為のどのような歴史にも、平坦な道のりは僅かであって寧ろ険しい困難な状況が立ちはだかることが多い。同朋会運動の歴史もまさしくそのようなものであり、「終焉」とまで云われる危機に直面していたということである。

しかし、その歴史の断層は、それで断ち切れることなく、新たな時代の運動の基盤たる「新宗憲」を生み出し、それまでの「特別伝道と推進員教習」を再生した「推進養成講座」を生み出し、運動の新たな展開が始まった。今こそ今日の私たちの現状を直視し、真摯に教学振興と教化推進に軸足を置いた宗務機関の質的転換を図らなければならないと考えている。

## 答弁者主旨（木越参務）

### 「天皇制と部落差別問題」・「見真額」について

かつて、部落解放同盟初代中央執行委員長であった松本治一郎氏は、天皇制と部落差別問題について、「貴族あれば、賤族あり」とその本質を端的に表している。諸説あるが、中世、貴族が登場したと同時に、被差別民衆も生まれたともいわれている。身分差別の頂点にあるものが「天皇」であり、その対極にあるものが「賤民」であって、そこに穢れ意識も加わり、忌避や排除の意識を育てたという考えによるものである。たとえ一人でも生まれや家柄・血筋によって特別に尊い人がある限り、反対の極に特別に卑しい人があることを意味する。この松本治一郎氏の言葉は、部落問題を解消する上で重要な指摘であり、宗門の現状を照らす言葉であると考えられる。

見真額については、昨年も申し上げたことであるが、宗門においては天皇制の問題にも関わる菊門など、矛盾を抱えたものがいくつもある。見真額をはじめとするこうした矛盾を、宗門に属する私たちが、一人ひとりの信仰の問題として、深めていくことこそ大切なこと。発行予定の学習資料集では、この問題を一人ひとりの課題とし、学ぶことが出来るよう学習の視点について触れるとともに、2011年の発行以後に判明した史実について増補している。具体的には概説編の第5章「勅額下賜」の部分の改訂と第6章として蓮如上人への「慧灯」大師号宣下の歴史について増補する予定。どちらも国家との関係で注視すべき歴史である。改訂版が発刊されたら是非とも学習にお役立てることを、願います。教区等での学習会には、教学研究所より講師の派遣を行っているので活用してほしい。